【遺跡紹介】 長崎港の台場
―神崎（こうざき）台場跡―

落　矢　八　郎

1．はじめに（第１図）

近世の長崎港にはかつて多くの台場が存在しました。それぞれの台場には砲台等を設置し，異国船の監視に従事したそうです。長崎港に存在した台場はその設置された年代から大きく在来御台場・新規御台場・増台場などに分けられ，当時の長崎港には数多くの台場が存在し，その状況は要塞と化した状況であったと推察できます。その後，時代が近代へ移ると台場は廃止されましたが，明治30年以降には陸軍省による長崎要塞が各地に設置されるようになりました。この要塞の多くは近世の台場跡の付近に築かれたものです。このことは，近世の台場が軍事的にも長崎港の要所を押さえた場所であったと理解できます。

このように近世の長崎港に数多くの台場が存在した背景には鎖国体制下の政治的原因が考えられます。江戸幕府が海外貿易の窓口を長崎にしたことが，その後の台場建設に繋がっていったのです。

今回，数多く存在した台場跡の中に神崎台場跡という遺跡があります。現在は女神大橋が近くを通っているので，長崎南部の住民は比較的簡単に訪れることができますが，かつては，西泊経由もしくは船で行かねばなりませんでした。陸の孤島という表現は語弊を招きますが，とにかく神崎まで行くことは大変なことでした。

本稿では消滅の可能性が高い遺跡の報告を主たる目的とし，崩落等の危険性が高い神崎台場跡の報告を考えました。

第１図　神崎台場跡位置図（Ｓ＝１/25,000）

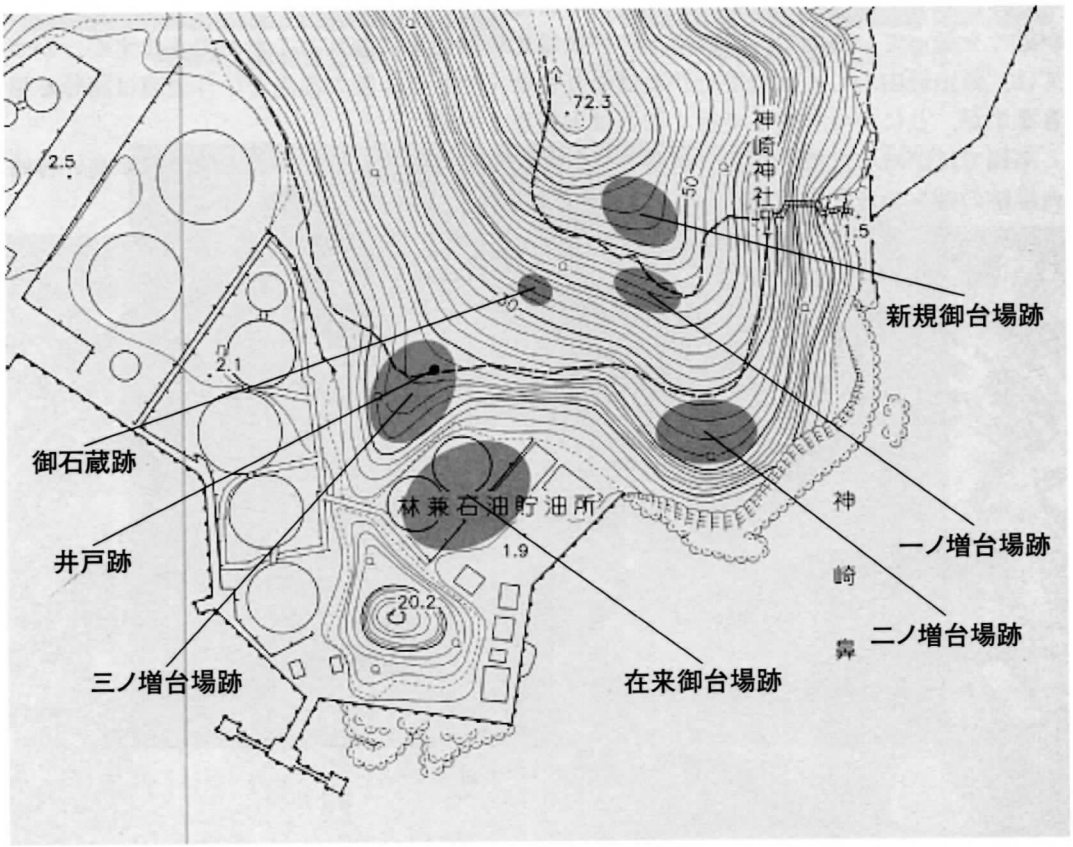
2．立地・環境（第２図）

神崎台場跡は長崎市西泊・木鉢地区にかけて所在しています。現在，ここには神崎神社が祭られていますが，この神崎という地名の由来には神功皇后の三韓（馬韓・辰韓・弁韓）征伐の伝説が関係しているとのことです。

一説によると，神功皇后が三韓征伐の帰りに深江ノ浦（現在の長崎港）に立ち寄った際に乗船した船の底から白狐が現れたそうです。神功皇后は大変喜び，瓊浦と神崎に参り大神を祭るようにいわれたそうです。その時，白狐に三韓から持ち帰った古い金印を渡し，その白狐は神崎に鎮座したとのことです。また，古い金印以外にも三韓から持ち帰った鎮懐石も神崎の地に賜ったそうです。

以上，簡単ではありますが，神崎神社の縁起を紹介しました。現在，古い金印は紛失したといわれていますが，鎮懐石は今でも神崎神社内にあるそうです。江戸時代になると，台場建設のため今の地に移され，その後も人々からの信仰を集め続けています。

神崎神社および神崎台場跡は標高70m以下の山中に存在します。山中を散策すると，岩盤の露頭が至る箇所で確認できます。また，神社側には規模が大きい岩盤が聳立しており，崩落防止のためのロックネットが敷設された状況です。全体的に神社側・台場側ともに急傾斜をなしています。この地は現在，灌木が繁茂する状況で散策するには不向きですが，往時は大波止から伊王島までの素晴らしい景色が一望できた場所であったと考えます。



第２図　神崎台場跡遺構配置図（Ｓ＝１/2,500）

3．踏査結果（**第２図・写真１～写真４**）

(1) 踏査報告

今回は『日本城郭体系』の資料を中心に在来御台場跡・新規御台場跡・増台場跡・御石蔵跡・井戸跡の所在確認を実施しました。それぞれの位置確認はできましたが，状態は必ずしも良好ではなく，石垣に至っては一部のみの確認にとどまる程度でした。

①在来御台場跡（**第２図・写真１**）

承応二年（1653）に松浦鎮信により建設されました（石火矢…５挺，大筒…３挺）。現在油槽所となっているため，現地へ行けませんが，古図（註１）で対比すると神崎とその南側に位置する陸続きの島との間に在来御台場は存在したそうです。

②新規御台場跡（**第２図・写真２**）

文化五年（1808）に鍋島斉直により建設されました（石火矢…３挺）。現況として，平場が確認できる程度です。また，周囲をめぐる石垣は認められませんでした。

③増台場跡（**第２図・写真３・写真４**）

文化七年（1810）に黒田斉清により建設されました（石火矢…16挺）。建設された政治的背景としてイギリスのフェートン号事件（註２）が大きく影響しています。

ａ）一ノ増台場跡・御石蔵跡（**第２図・写真４**）

新規御台場跡の下方に位置します。現況は灌木が繁茂する状況ですが，平場は確認できます。東側には近代以降と思われる円形の穴が掘られており，一部が破壊された状況です。また，周囲の石垣は確認できませんでした。御石蔵は通路をはさんで一ノ増台場とは対照的な場所，すなわち，新規御台場の南側に位置します。平場は確認できますが，石垣は認められません。灌木が繁茂しており御石蔵の付近には岩盤の露頭が認められます。

また，新規御台場から御石蔵までの通路に石製の階段が存在します。特に一ノ増台場跡から御石蔵跡間の階段は良好な形で残っています。しかし，この階段の時期は不明です。

ｂ）二ノ増台場跡（**第２図・写真３**）

一ノ増台場の下方に位置します。現況は平場が確認でき，台場内に神崎神社⇔油槽所間の通路が存在します。周囲の石垣の有無ですが，そのほとんどは存在していません。しかし，裏込めの残存状況の観察から，この遺構はかつて石垣が存在した可能性があります。

ｃ）三ノ増台場跡・井戸跡（**第２図**）

御石蔵跡の南西側に位置します。平場の状況が確認できますが，灌木等の繁茂が顕著でその詳細は確認できません。台場内はｂ同様通路があり，その通路沿いに石垣を確認しました。これは部分的な残存で時期は不明です。さらに，通路沿いで井戸跡も確認しました。規模は直径１㍍前後ですが，井戸内は埋められ，内部の石垣の有無は不明です。

(2) まとめ

在来御台場跡を除く各遺構の平場は残存しましたが，石垣等はほとんど確認できない状況でした。その原因として，近代に入って石垣が解体されたことが考えられます。別の場所に石垣の一部が転用されたと思われますが，可能性の１つにしか過ぎません。ただし，油槽所の護岸の石垣と神崎神社内の石垣はこの問題を解決する手段として有効な材料と考えます。

4．おわりに

長崎港の台場として今回は神崎台場跡を紹介しました。特徴として，新規御台場～増台場まで増築され，かつ，規模を拡大しながら存続したことがいえます。２回の台場の増設例は少なく，神崎台場跡以外では高鉾台場跡・長刀岩台場跡の２箇所のみです。このことは異国船を監視する上で重要な位置・意味を示したと考えます。

神崎台場跡以外にも台場は数多く存在します。今後，機会があれば他の台場跡の現況報告を考えています。

（2007年１月20日）

【註】

註１　御台場十二箇所切絵図

註２　本稿ではこの事件の詳細は割愛させていただきます。

【参考文献】

新人物往来社　1980「神崎台場」『日本城郭体系』第17巻

【追記】本遺跡を踏査する機会を与えて下さった東五郎氏に感謝の意を表します。

写真１　在来御台場跡

写真２　新規御台場跡

写真３　二ノ増台場跡

写真４　階段跡